

Self and Community: Unveiling Positive Functions of “Hiding” in Winesburg, Ohio

自己と共同体—『ワインズバーグ・オハイオ』に
おける「隠す」行為の肯定的機能を読みとく

熊本県立大学 文学部 英語英米文学科

2012003 安藤優希

CONTENTS

1. Winesburg, OhioとSherwood Andersonについて
2. Thesis Statement
3. **身体の一部**を隠している例
“Hands”のWing Biddlebaumが「手」を隠している描写について
4. **感情や考え**を隠している例
“The Untold Lie”のRay Pearsonが「忠告」を隠している描写について
5. **自分自身の姿**を隠している例
“Adventure”のAlice Hindmanが「自分自身」を隠している描写について
6. まとめ

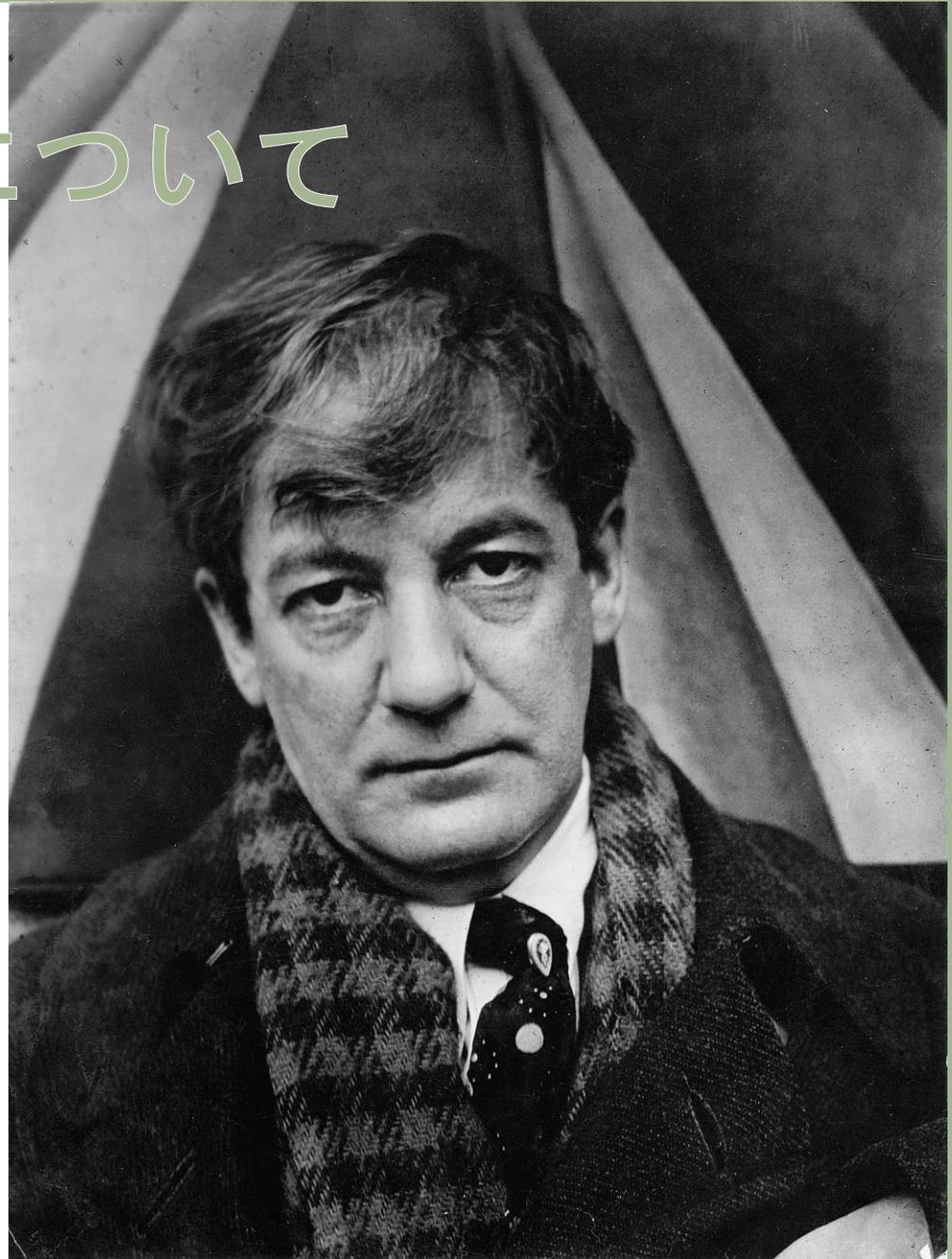
Winesburg, Ohio(1919)について

Sherwood Anderson(1876-1941)著

- ・モダニズム初期
- ・物質主義的な社会に懐疑的な立場
- ・人々の思考や感情など、内面的な部分を積極的に表現
- ・William Faulkner, Ernest Hemingway, Thomas Wolfeなどに影響を及ぼす

架空の町で暮らす、奇妙な人々を描いた短編小説群

- ・21編もの短編+4章構成の物語で構成、新しい試みの形式
- ・南北戦争後の急速な工業化に取り残された架空の町
- ・住民たちは、それぞれ奇妙な特徴を持つ。
- ・George Willardという少年は唯一、作品全体に登場する。
彼が町から出ていくまでの成長物語としても読むことができる。



Thesis Statement

何かを「隠す」という行為は、一般的には否定的なイメージを持つ。しかしWinesburg, Ohioにおいて、人々が何かを「隠す」行為は、彼らの共同体と個人のバランスという観点から見ると、肯定的な機能を持っている。

「隠す」ことに注目した理由

- ・ほとんどの物語で、**the moment of revelation**（人々が突然のひらめきによって何かを行ったり、彼らが隠していた姿が現れる）が描かれ、注目されてきた。しかし、その前後に必要な「隠す」行為にはあまり言及がなかったから。
- ・通常は否定的なイメージがある「隠す」という行為の、肯定的な面を見出すことで、新たな作品の読み方を提示することができると思ったから。

“Hands” のWing Biddlebaumについて

Wingの奇妙な特徴は、自分の意図に反して素早く動き回る「手」だった。何十年前も前、彼がペンシルヴェニアで教師をしていたとき、無意識のうちに生徒たちを「手」で愛撫しながら熱く語っていた。生徒たちの親から、その行為を同性愛的なものだと非難されて町を追い出されたことで、自身の「手」を隠してワインズバーグでひっそりと生きていた。

主張

- ① Wingは手を隠すことで、アイデンティティや夢、自分自身を保護することができる。
- ② Wingは共同体に配慮しつつも、個人の夢や真理を諦めていない人物である。

① Wingは手を隠すことで、アイデンティティや夢、自分自身を保護することができる

※Wingの夢＝子供たちに、他人がいうことを気にして生きるより、様々なことを夢想すべきだと伝える

Pennsylvaniaでは、夢を実現するために「手」を使い、同性愛者だと非難されてリンチされ、追い出された。



一方で・・・

Winesburgでは、その「手」を隠し、家事や仕事などのために使うことで、町の自慢すべき特徴になっていた。

—“Winesburg was proud of the hands of Wing Biddlebaum.” (Winesburg 10)

☆Wingに夢をもたらす「手」を隠すことで、周囲の人々から夢を非難されたり、奪われることを防ぐ。

☆Wing自身や、追い求めている夢の安全を確保することに成功している。

Wingは唯一Georgeに夢を打ち明ける
—“You must begin to dream,”

(Winesburg 11)

夢を隠すこと＝諦めることではなく、一時的に自分自身の心の中に避難させ、保護していると捉えられる。のちに作家になるGeorgeによって、Wingの夢が語られることが期待できる。

② Wingは共同体に配慮しつつも、個人の夢や真理を諦めていない人物である。

共同体への意識

- ・ Pennsylvaniaで、同性愛的、小児愛的だと非難された「手」
—“he [Wing] felt that the hands must be to blame” (*Winesburg* 13)



Winesburgでは、手を隠すことで、共同体とは不釣り合いな性的指向を持っていると非難されることを回避している＝共同体への配慮、適応しようという意識

自己への意識

- ・ 自分の夢を住民たち（George Willard以外）に打ち明けることはない
 - ・ 自分自身を町の一部だとは感じていない
- Wing Biddlebaum, [...] did not think himself as in any way a part of the life of the town where he had lived for twenty years.” (*Winesburg* 9)



共同体よりも、自己の夢や真理を大切に心の中に保管して、保護している様子

“The Untold Lie” のRay Pearsonについて

Rayは6人の子供と妻を養うために、農場で真面目に働いていた。ある日、仕事仲間のHalという青年から、恋人を妊娠させてしまい、どうしたらよいかという相談を受けたことで、自分自身の偶然の結婚を思い返す。Rayは結婚に懐疑的な意見を持ち始め、Rayに恋人と結婚しないべきだと忠告しに行くが、結局それだけの気力はなくなっていた。彼は、世界を嘲笑したい気持ちに駆られ、闇の中に消えていった。

主張

- ① Rayは忠告をしないことで、共同体の調和を保つことに成功している。
- ② Rayは共同体と個人の境界に存在し、両者のバランスを取っている人物である。

① Rayは忠告をしないことで、共同体の調和を保つことに成功している。

RayはHalに「結婚すべきではない」と忠告できなかったが、それを後悔している様子ではない。

—“It’s just as well. Whatever I told him would have been a lie.”

(Winesburg 116)

子供たちの存在

☆子供たちの存在がRayとHalにしがみつく感覚

—“[t]hen as he [Ray] ran he remembered his children and in fancy felt **their hands clutching at him**” (Winesburg 115)

—“[a]ll of his thoughts of himself were involved with the thoughts of Hal and he thought **the children were clutching at the younger man also**” (Winesburg 115)

子供たちを見捨てるべきではないと無意識に自覚している？

共同体の慣習

☆小さな共同体で、妊娠させた恋人を見捨てる行為は問題であり、Ray自身も（Wing Biddlebaumのように）Winesburgから追い出されてしまう可能性がある。

Rayは結果的に、Halの将来の結婚生活やHalの恋人の子供たち、共同体の安定性、周囲との関係などを守る役割を果たした。

② Rayは共同体と個人の境界に存在し、両者のバランスを取っている人物である。

共同体への意識

- ・ 恋人を妊娠させたにもかかわらず、その恋人と結婚しないという決断は、小さな共同体では重大な事件である。



無意識であったにしろ、結婚に対する懐疑的な意見を隠すことで、結婚に対する慣習に従う。Halの将来の結婚生活や、自身の家族、周囲との関係性を守る。

自己への意識

- ・ 反抗的な意見を隠すことで、自身の家庭を壊してしまう可能性がある。
- ・ Halのもとへ走っているときに、抑制されていた感情に気づいた。



共同体の規範を守りつつ、自身の家族の平和も保っている。
また、自分の中に秘められた精神や考えを発見することができた。Halに忠告することはできなかったが、自己発見の経験を忘れることはないだろう。

“Adventure” のAlice Hindmanについて

Aliceは16歳のころ、Nedという青年と恋愛をしていた。しかし、彼は仕事を探すためにシカゴへ行き、Aliceのことなどすっかり忘れてしまっていた。AliceはNedとのことを忘れられず、一生懸命に仕事に明け暮れていた。

9年ほど経ったある日、Aliceは奇妙な欲望に取りつかれて、雨が降る町を裸で駆けた。雨の中彼女が話しかけた老人から聞き返されたことで、彼女は自分が完全に孤独であることを理解し、自室へ閉じ込もって「すべての人間は独りで生き、独りで死ななければいけない」という考えに無理やり向き合った。

主張

- ① Aliceは部屋に閉じこもることで、他者から自己、理想から現実へと目を向けることができる。
- ② Aliceは自分を疎外させることで、共同体より、自分自身の真理や感情を尊重しようと試みている人物である。

① Aliceは部屋に閉じこもることで、他者から自己、理想から現実へと目を向けることができる。

他者から自己

自分の感情を無視し、他者とのつながりを求める生活

例)

- ・いつまでもNedに執着して、純潔を守り続ける。
- ・教会の集会に積極的に参加し、Willという男性とかかわりを持つとする。(Nedへの執着心により、拒絶することになる)

理想から現実

理想の生活ばかりを夢見る生活

例)

- ・Nedとの実現するはずのない結婚生活を夢見る。
- ・Nedを理想化して、待ち続ける。

△ Adventureの失敗、部屋への避難 △

“many people must live and die alone, even in Winesburg”
(Winesburg 64)

自己と向き合う、個人の生活

例)

- ・自分だけの保護された空間、時間を得ることができる。
- ・他者→自己の内面的な部分への回帰

Nedという理想から解放されて手にした、現実的な生活

例)

- ・Aliceが向き合おうとしたアイデアに、Nedは含まれていない。達観したアイデア。
- ・自分自身と生きていくという決心

② Aliceは自分を疎外させることで、共同体より、自分自身の真理や感情を尊重しようと試みている人物である。

共同体への意識

共同体や他者とのつながりへの憧れは持っていた。（物語序盤～中盤）

—“I want to avoid being so much alone. If I am not careful I will grow unaccustomed to being with people”(*Winesburg* 63)

自己への意識

自分の内側にある衝動性や情熱を、周囲に明かさなくなった。（27歳現在）

—“She was very quiet but beneath a placid exterior a continual ferment went on”
(*Winesburg* 59)



alienation（自分をあえて社会から隔離して、個人の内面をより重視する）の傾向。
共同体への参画よりむしろ、自身の精神生活、inner selfへの気づき。

部屋に閉じこもったことで、他人との関わり合いの中で存在する自分としてではなく、個人の空間で自分の考えや気持ちを尊重しながら生きていく自分として見つめなおし、手放しで夢見ていた理想世界ではなく、現実世界に生きていくことが予想される。

まとめ

*Winesburg, Ohio*の“Hands” “The Untold Lie” “Adventure”において、「隠す」ことは肯定的な機能を果たしていると言える。また、「隠す」ことで個人の差こそあれ、「個人」と「共同体」のバランスをそれぞれうまく取ることに成功している。

Wing Biddlebaum

手を隠すことで、アイデンティティーや夢を保護しながら、共同体と適切な距離を保つ。

Ray Pearson

本音や欲望を隠すことで、Halや子供たちとの関係や、彼の家族が属する共同体の調和を保つ。

Alice Hindman

身を隠すことで、現実と、自己 (inner self) に目を向ける。

Works Cited

- Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio*. 1919. Edited by Charles E. Modlin and White, Ray Lewis, 1st edition, Norton Critical Edition, W. W. Norton, 1996.
- Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio*. 1919. Arrangement with G. P. Putnam's Son, with the introduction by Malcolm Cowley, G. K. Hall Large Print Perennial Bestsellers Series, G. K. Hall, 1999.
- Ciancio, Ralph. "The Sweetness of the Twisted Apples': Unity of Vision in Winesburg, Ohio." *PMLA*, vol. 87, no. 5, 1972, pp. 994-1006. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/461177>. Accessed 12 Nov. 2023.
- Enniss, Stephen C. "Alienation and Affirmation: The Divided Self in Sherwood Anderson's 'Poor White.'" *South Atlantic Review*, vol. 55, no. 2, 1990, pp. 85-99. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/3200262>. Accessed 14 Nov. 2023.
- Love, A. "Winesburg, Ohio and the Rhetoric of Silence." *American Literature*, vol. 40, no. 1, 1968, pp. 38–57. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/2923697>. Accessed 13 Dec. 2023.
- Stouck, David. "Winesburg, Ohio as A Dance of Death." *American Literature*, vol. 48, no. 4, 1977, pp. 525–42. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/2925218>. Accessed 21 Dec. 2023.